

# 古代メソポタミアのニサバ女神（穀物と書記術の神）の体系的研究

辻田 明子

Leiden University Institute for Area Studies 博士課程

## 緒 言

本研究は、報告者の博士論文研究「古代メソポタミアのニサバ女神（穀物と書記の神）の体系的研究」の一部を構成するものである。興味深いテーマを多く含むにもかかわらず、これまで大きな議論の行われてこなかったニサバ女神について、その属性と崇拝の歴史の変遷と地域的広がりを考察する。本報告は、ニサバ女神の名前にかかわるものである。

ニサバ女神の名前は、それぞれ AN、ŠE、NAGA の音をもつ3つの楔形文字であらわされる。AN は神格を示す限定詞であり、ŠE は穀粒を示す。NAGA はある種の植物で、伝統的にはアルカリを多く含み、その灰が石鹼づくりに使われたと考えられてきた。そうであればなぜ、ニサバ女神はアルカリ植物の守護女神ではなく穀物の守護女神となったのか。NAGA は本当にアルカリ植物なのだろうか。この問いは、ニサバ女神の名前の語源、穀物神としての属性、書記（術）や星辰などのかかわりをみるうえでも重要であると考え、NAGA 植物を詳細に分析することにした。

なお、本報告において、大文字アルファベットは特定の楔形文字を、小文字アルファベットはシュメール語の単語を、イタリック体の小文字アルファベットはアッカド語の単語を示す。

## 方 法

### 1. 史 料

ニサバ女神の起源は、楔形文字を発明したとされるシュメール人以前の文化に遡る可能性もあり、「ニサバ」の語源に関して、研究者の見解は一致していない。ただし文字発明以後の古代メソポタミア世界では、ニサバ女

神はシュメール人を中心に崇拝されたので、本研究では紀元前3千年紀からシュメール語が死語となる紀元前2千年紀初めごろまでの史料を対象とし、NAGA に関連する記述を集め、分析した。シュメール語史料を、語彙リスト、文学テキスト、行政経済文書に分類した。文学テキストのほとんどは、シュメール語が死語となったころ（前2千年紀前半）にセム人によって書き残されたが、その成立はより古く遡ると考えられる。行政経済文書は同時代史料であり、紀元前3千年紀末のウル第三王朝時代のものがそのほとんどを占める。語彙リストは時代を通して書き残されたが、NAGA に関連する史料の数は少なく、言及する際にはその都度示すこととする。

### 2. 先行研究

ウル第三王朝期ラガシュ出土の行政経済文書から、Thureau-Dangin は、古代メソポタミア人が NAGA から石鹼の原料となる灰を得たのではないかと提案した<sup>1</sup>。この見解をもとに、現在に至るまで NAGA は石鹼づくりに利用されたと理解されてきた。しかしながら、同じウル第三王朝期に、NAGA がビール、パン、油、魚などの食品と共に給与として支払われていたことを指摘し、Oppenheim は NAGA をマスタードやクレソンなどの香味野菜（香辛料）としても理解できる可能性を示した<sup>2</sup>。Oppenheim は NAGA を食用でもあり、石鹼の原料でもあったと考える。さらに、NAGA が皮革職人や織物職人にとくに支給されていることから、NAGA が皮なめし、漂白・染色、あるいは羊毛の縮絨に使われたとする見解もある<sup>3</sup>。

1 de Genouillac, H.: *RA* 7, 1910, 113-114.

2 Oppenheim, A. L.: *Catalogue of the Cuneiform Tablets of the Wilberforce Eames Babylonian Collection in the New York Public Library*, p. 6, New Haven, 1948.

3 Sigrist, M.: *JCS*, 33, 159-160, 1981. Waetzoldt, H.: *Untersuchungen zur Neusumerischen Textilindustrie*, pp. 172-174, Roma, 1972.

## 結 果

紀元前1千年紀に記された、シュメール語・アッカド語の二言語表記の、アッシュル出土語彙リストによると、シュメール語の *naga* は、石鹼やガラス製作の原料と考えられている *uhūlu* 植物のほか、マメ科植物とする説のある *mangu* とも訳されている。また、初期王朝期（前3千年紀半ば）の行政経済文書において、NAGA は ŠE（穀粒）をともなって表記される。ウル第三王朝期になると混乱がおこり、ŠE と NAGA が一つの文字であるかのように圧縮され、時には ŠE と NAGA の前に余分に ŠE が付加されていることもある。このことから、古代メソポタミア人も、NAGA の同定や綴りに混乱をきたしていたと言える。

### 1. シュメール語文学テキスト

シュメール語文学テキストにみえる NAGA はまず、「聖なる NAGA (*naga kug-ge*)」や「清浄なる NAGA (*naga sikil-le*)」と表現される。すなわち、NAGA は神聖で清らかな植物であるとみなされていた。

また、慣用表現として「*naga dub2*」と「*naga sub2*」がある。いずれも「擦りつける」という意味がある。前者は大地や神殿の清めを描く場面で、後者はイナンナ女神の沐浴の場面にみえる。沐浴の過程でイナンナ女神は、まず水を浴び、NAGA をこすりつけ、さらに水を浴びる。そのため、ここでの NAGA は慣例として「石鹼」と訳されてきたが、ローションやクリーム、香料、薬などである可能性も否定できない。

というのも、シュメール語のことわざ集には、NAGA が独特の、あるいは強い香りをもつことを示唆する記述が2例あるからである<sup>4</sup>。ことわざ集は難解で、その正確に意味するところはよく分からないが、一つめは「ロバはあまりに悪臭を放つため、ロバに擦りつけるような NAGA はない」というもので、もう一つは「NAGA を擦りつけた牡牛にたいして犬が吠えかかる」というものである。いずれも、NAGA と匂いと連想を示しているように思われる。

最後に、NAGA は「小さな粒 (*di4-di4-la*)」と共に言及される場合がある。このことは、ニサバ女神の名前の綴りや、行政経済文書の NAGA が初期王朝期から ŠE（穀粒）をともなうこととも一致し、NAGA の種がおもに利用されていたためと思われる。

### 2. 行政経済文書

ここでは、NAGA に関してとくに重要な情報の得られるウル第三王朝期の行政経済文書の分析結果を記す。ウル第三王朝期にはおもに、*naga* のほか、「砕いた *naga* (*naga gaz*)」と「発芽した *naga* (*naga si-e3*)」の3種類の NAGA がみえる。行政経済文書は以下のように5つのグループに分類できる。

第一のグループは、いわゆるメッセンジャーテキストと呼ばれる、給与支給の記録であり、NAGA に関する行政経済文書のなかでは最も数が多い。現在閲覧可能な史料のほとんどはウンマ出土だが、ラガシュ、プズリシュ・ダガン出土の文書もある。それよると、NAGA が支給されるのは、何らかの称号なり、肩書きを持つ個人である。NAGA はある種の贅沢品、貴重品であったらしい。しかし、肩書きのない「*kas4*（使者・走る人）」に NAGA が支給される場合も数例あり、その際 NAGA は、ビールやパン、油などと共に「食料品 (*ša3-gal*)」として支給されている。そのためメッセンジャーテキストの NAGA は、Oppenheim の指摘したように食用であったと考えられる。

第二のグループは「奉納 (*sa2-du11*)」の記録である。ほとんどが *kas4*（使者・走る人）による奉納だが、奉納先の記述はない。また、通常は「砕いた NAGA (*naga gaz*)」を奉納するが、*naga* や「発芽した NAGA (*naga si-e3*)」が奉納された例もある。奉納品は食品に限らず、奉納記録の NAGA が食用であったかは分からない。奉納記録にはそれぞれ、類似した物品が記載されており、3種類の NAGA は別の植物ではなく、同じ植物の異なる状態を示すものと思われる。

第三のグループは物品の値段リスト、第四のグループは物品の受領と配達記録だが、二つのグループの区別は難しい場合があるため、ここでは一緒に扱う。なお、織物業に関連する第五のグループもここで検討する。というのは、値段リストや受領と配達記録において、「*azlag2*（羊毛の縮絨職人）」や「*ašgab*（皮なめし職人）」が *naga* や *naga si-e3* を扱う場合があり、織物業に関する記録と相互にかかわると考えるからである。ただし、値段リストや受領と配達記録からは、NAGA の使用の詳細を追うことは難しい。

Nik 438 によると、動物の皮の加工過程で、*naga* と油が使われる。また、MVN 18, 486 では *naga* が、

4 Alster, B.: Proverbs of Ancient Sumer, Bethesda, 1997. 2.79および5.14参照。

MVN 16, 1002 では naga si-e3 が、「織物 / 生地 (tug2)」や「リネン (gu gada)」を「きれいにするため (dan)」に受け取られる。TCTI 2, 2819 から、「きれいにする (dan)」とは織物の加工工程の一部であることが分かる。さらに、SET 274 と Orient 16 107 174 は、羊毛加工における naga の利用をも示唆している。

このようにみると、NAGA が皮革、亜麻、羊毛などの加工過程で使用されたことは疑いがない。しかし、皮なめし、漂白、染色といった特定の狭い用途に利用されたのではなく、清める、きれいにする、消毒するといった、より広く一般的な目的があったように思われる。

このほか、わずか数例ながら、NAGA が畑や果樹園に「置かれた」とする記録もあり、あるいは肥料として使われた側面があるのかもしれない。もしそうであれば、NAGA をその名に含むニサバ女神が、穀物の守護女神とされたことも説明がつくかもしれないが、史料があまりにも少なく、さらに検討を要する課題である。

## 考 察

シュメール語史料の分析結果は、NAGA が食用であったことを示す。これは、NAGA を石鹼の原料とする先行研究の理解を否定するものではない。しかし、NAGA は独特の香りが重宝されていた可能性があるうえ、シュメール語史料は NAGA の種子がおもに利用されていたことを示す。石鹼を使って「きれいにする」のは現代の

われわれの感覚であるから、現段階では、NAGA を石鹼の原料と断定するよりは、「清めや消毒、洗浄のために使用した」と理解しておきたい。

NAGA 植物の具体的な同定や、NAGA が肥料として使われ、そのためにニサバ女神が穀物の守護女神とされた可能性に関しては、現段階では結論を保留としつつ、今後博士論文研究をすすめながら理解を深めたい。

## 要 約

古代メソポタミアにおいて NAGA 植物はアルカリを多く含み、その灰が石鹼づくりに利用されたと考えられてきた。史料の分析結果は、この理解を否定するものではないが、NAGA 植物は、その種子がおもに活用され、独特の香りのあった可能性もある。そのため、先行研究の議論するように、NAGA の使用目的は、石鹼作り、皮なめし、漂白、染色などの限定的なものではなく、消毒や清めなど、より一般的なものであったと考える。

## 謝 辞

本研究の遂行にあたって、公益財団法人三島海雲記念財団より助成金を賜りました。深く感謝し、心からお礼を申し上げます。

## 文 献

Michalowski, P. & Braun-Holzinger, E. A.: *RIA*, 9, 575-579.